

1 学校経営計画 別紙の通り

2 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
(1) 学校経営	(1) 危機対応等 ◎(1A)ICTを活用した学習環境の構築：入試事務、成績処理、調査書や指導要録等の処理システムを導入した。システムを使用しつつ不適切な点を修正調整して、信頼できるシステムに作り上げる。（教務部+教育学）	(1A)Google for Educationを利用して、対面とオンラインのハイブリッドな学習環境を構築し、日常的に活用した。保護者との連絡や、成績処理に BLENDを活用して効率的な作業ができた。入試事務や採点に miraicompass、採点ナビ等のICTを活用して効率的に作業ができた。入試問題にミスがあり、合否判定の見直しなど受験生にも影響を与えてしまった。	総合B (1A)B	(1A)BLENDの処理について、本校の業務に合うように、今後も改善を求めることを継続していく必要がある。デジタル採点システムも定着してきており、採点業務の大幅な時間短縮が達成できた。入試問題にミスが発生しないよう対策をする。	ミスが発生しないように原因究明をし、再発防止を策定する。
	○(1B)学校行事における対応：部活動の地域移行の状況を把握しつつ、本校としての部活動の中期的未来像を構築する。（企画会議+生徒指導部+運営委員会）	(1B)教員アンケートを2回実施し、本校の部活動の未来像を議論した。まだ、はっきりとまとまってはいないが、部活動指導員等の外部のリソースを活用して、教員の負担軽減を図るという方向性は見えてきた。	(1B)B	(1B)部活動における顧問の負担を軽減するために、部活動指導員の拡充と休日の学校施設の利用に関する検討の必要がある。部活動指導員にかかる経費負担についても検討が必要である。	部活動指導員の活用の拡大や、外部委託等を含めて継続的に検討する。
	(2) 広報活動の活性化 ◎(1C)広報活動の充実：ホームページを生かし、各種情報を広く迅速に伝える。校長ブログは月に1回以上更新し、本校の進んでいく方向を明確に示す。各種行事や部活の状況、進学実績等は、即時掲載し、平均して週に2回以上更新する。生徒の声、保護者の声、学校外からの反応等のアップを行う。（広報）	(1C)行事の実施についての記事、学校説明会や研究会の告知等については、可能な限り迅速に作成と更新をすることができた。教育成果については、依頼があり次第迅速に更新することができた。教科のページについては今年度の更新をすることができなかった。	(1C)B	(1C)教員が他の校務と並行して更新作業等を行うことは容易ではない。更新が頻繁な文章については、ページ編集の権限を委譲することも検討したい。データ提供の督促をきちんとすべきであった。	生徒が作成したコンテンツを利用するなど、教員の負担を軽減しながら、広報活動を行うことを検討する。 Webページの更新作業の分担を見直し、一部の教員に過重な負担がかからないように工夫する。
	◎(1D)学校公開：在校生の保護者向け授業公開と中学生とその保護者等への授業公開をそれぞれ行う。本校での学校説明会、校長が塾等に赴いての学校説明会など年に20回以上行う。（庶務+広報）	(1D)保護者向け授業公開と外部向け授業公開を実施した。いずれも多くの方に参観いただけた。秋の学校説明会は土日連続で実施しているが、午後は参加者数が少なかった。	(1D)B	(1D)学校説明会については、他の行事も踏まえて日程を定め、学校全体で取り組んでいくべきであるが、土日連続での開催は教員にとって負担が大きい。また、学校説明会での部活動紹介について、申し込みの際に情報を知りたいという要望が寄せられた。早めに部活動の計画を立ててもらい、どの部活が見学できるのかを公開したほうが良い。	在校生保護者への授業公開は、好評であったので継続する。 学校説明会では、もっと生徒に協力を仰いで、教員の負担を軽減しつつ、学校の魅力をアピールしていきたい。
	(3) ステークホルダーとの連携強化 同窓会辛夷会、後援会泰山会、PTA泰山会、下馬新生自治会、隣接する老人ホームと協力をする。	(1E)同窓会からの資金援助を受けて、本館のトイレの洋式化工事が完了した。進路講演会等で、同窓生に講演をしていただいた。管理職が地域自治会の防災活動等に参加した。PTAが70周年記念グッズを販売し、利益を後援会泰山会を通じて学校に役立てていただいた。老人ホームが3月に営業開始することによって、施設や人的交流について話し合い、生徒の部活動の発表の機会を得た。	(1E)B	(1E)同窓会、後援会、PTAとより緊密に連携する。地域の自治会や老人ホーム、保育園などと生徒を含めた交流の機会をさらに検討する。	後援会泰山会と協力しながら夏の熱中症対策について進めていく。 同窓会、後援会、PTAとより緊密に連携する。地域の自治会や老人ホーム、保育園などと生徒を含めた交流の機会をさらに検討する。
	(4) 働き方改革の視点での業務改善 ○(1F)会議の量的軽減：企画会議や主任会を活用して調整を十分に行うとともに、会議目的の明確化とICTの活用で進行を効率的に行う。その結果として、対面での職員会議をはじめ諸会議の回数減少と時間短縮を図る。一方、オンラインを活用した情報交換（資料共有職員会議）は、毎週行う。さらに、保護者向けにBLEND（校務支援システム）を活用した通知・情報提供をこまめに行う。（企画会議）	(1F)書面会議の質疑にTeamsを活用することにより、書面会議での質問の効率化を図った。これまでの経験の蓄積を合わせて職員会議の時間短縮は着実に進んでいる。保護者への情報は、ほとんどがオンラインでの提供となって、記録も残り、効率的になった。	(1F)B	(1F)教員間の連絡がいろいろな経路で来るので、交通整理が必要である。会議の時間短縮が、会議の形骸化につながるということがないよう、対面での会議での対話を大切にすることを心がける。今後は、資料は事前に閲覧し対面の会議では重要な議論だけに絞るというような発想の転換も必要である。	会議の量的な軽減は重要だが、質が落ちないように、資料は事前に閲覧し対面の会議では重要な議論だけに絞るという工夫が必要である。

(2) 教育活動	(1) 本物教育の深化と進路支援の充実 ◎(2A)本物教育を強化した探究活動の充実：従来の本物教育を強化し生徒エージェンシーを育む探究活動等により「課題発見能力」「思考力」「判断力」「表現力」を育成する。特に東京学芸大学からの支援を活用し、専門性の高い探究活動を目指す。（研究部）	(2A)「SSH探究基礎」では探究講座の内容を改良し、昨年度より安定した運営ができた。「SSH探究」ではグループ構成（理数/社会課題）を昨年度一新し、他の活動に徐々に関連づけようとしている。「発展SSH探究」はそれぞれに充実した探究活動を進められた。教員研修と関連づけて、生徒エージェンシーの育成を探究活動と関連づけて考えてもらう機会を作ることができた。	総合B (2A)A	(2A)「SSH探究基礎」のスケジュールを早められるよう、カリキュラムマネジメントを進めて行く。「SSH探究」では継続テーマが根付くよう進められたら良い。「発展SSH探究」は進路指導部と連携して、推薦入試とのタイアップを目指せるように努力をしていく。	SSHの活動が限られた一部の生徒が取り組むものと受け止めている生徒が少なくない。どの生徒にも身近なものと捉えられるように、日頃の授業や学校内での紹介の仕方に、何か工夫を凝らしていただきたい。
	○(2B)1to1を活用した教科指導の充実：1to1の環境を活用し、積極的に生成AIを取り入れることにより、新学習指導要領と令和の日本型学校教育の目指す方向に沿った現代的で充実した教科指導を実現し、本物教育を深化させたカリキュラムを開発する。（カリキュラム委員会+教務部+研究部）	(2B)71期生にもMacbook Airによる1to1を実施した。取扱業者を変更してから、教員の業務が大幅に軽減された。1to1の環境を活用した授業実践を数多く展開し、外部に情報発信することもできた。	(2B)B	(2B)来年以降もICT環境の整備に努めていくことが重要である。次年度は学校内のWifiの更新である。生成AIの活用をもっと充実させていきたい。	1to1などICTを活用した教科指導は評価できるので、今後も継続していくべきである。ICTの技術進展は早いので、遅れないように環境整備等に注力すべきである。具体的には、来年度Wifi設備の更新工事を実施する。
	○(2C)授業を大切にする進路指導の充実：外部模試を進学指導の中心に据え、徹底的に活用する。他校比較、他学年との比較、同一学年の継続変化等を分析し、有効な教科指導と進路指導を探る。1学年では入学時の学力を客観的に把握し、個に応じた学習指導を行う。2学年では、1学年からの経時変化を明確にして中弛みを防ぐ。3学年では大学入学共通テストに対応した指導を充実させる。入学から卒業まで、授業を大事にする進路指導を徹底する。（進路指導部+学年）	(2C)1年：スタディサポートを4月、実力テストを9月、記述模試を1月に実施、模試の検討会が行われた。進路講演会を1月に実施（社会人52期・55期）。 2年：3年選択科目の決定について、1学期末に説明会を実施し、夏休みに面談をした上で9月に希望を提出させるスケジュールで実施した。進路講演会等の行事を実施するとともに、模試の分析会等に極力参加するように努めた。 3年：模擬試験や進路指導に関する分析会に担任が積極的に参加し、得た情報を学年会などでも共有するとともに、生徒や保護者への情報提供と周知を行った。	(2C)B	(2C)生徒の学力について「やればできるはず」という認識では通用しない状況が生じている。生徒のメンタル面でのサポートはさらに必要な状況になっている。選択希望提出後の変更希望が少なからず見られた。一定の手続きのもとで了承する方向で対応したが、進路に向けていかに覚悟と目的意識を持たせるかという点で課題が残った。生徒たちが「見通しを持って粘り強く」学習に取り組めるよう、外部模試の返却時などに個別生徒への声かけの必要性を実感した。	授業の大切さを学校として今まで以上に生徒・保護者に協調していく必要がある。 生徒たちが「見通しを持って粘り強く」学習に取り組めるよう、外部模試の返却時などに個別生徒への声かけを行い、学習のフォローをする。
	○(2D)進路支援力の強化：教員の進路指導研修を各学期で1回以上行い、生徒への進路支援力を強化する。その結果、外部模試の返却時の生徒への指導を充実させる。（進路指導部+学年）	(2D)データ利用の仕方を習得し、全教員へ情報を提供する。データを生かした担任の面談力アップを目指す。ベネッセによる校内分析会を5月、6月、10月、12月に実施し、2月末にも実施の予定である。	(2D)B	(2D)外部模試を分析し、そのデータに基づくより効果的な学習指導と進学指導を推進していく。	外部模試を分析し、そのデータに基づくより効果的な学習指導と進学指導を推進していく。
	◎(2E)医学部・教育学部・海外進学支援の充実：年2回の医学部ガイダンスに続き、同窓会と連携し他の職業に関するキャリア教育、外国の大学進学のためのガイダンス、教育学部ガイダンス等も行う。（進路指導部）	(2E)医学部ガイダンスを7月と12月に実施した。新たに教育学部ガイダンスを6月と12月に、勉強方法のガイダンスを6月に共通テストガイダンスを1月に実施した。東京科学大学（仮称）ガイダンスを3月に実施する。	(2E)A	(2E)外国の大学進学のためのガイダンスは、今年も主として個別対応になった。オンラインでの説明会は実施できなかった。ガイダンスの対応を進路指導部だけで行うのかを検討する必要がある。	外国の大学進学のためのガイダンスは、形式や担当者について、再度検討が必要である。他の分野のガイダンスも、ニーズを調査して新設することも検討する。
	◎(2F)大学個別試験対策の充実：大学個別試験対応の講習に加えて1年生、2年生向けの苦手克服の講習も解説する。さらに、全教科で生徒ごとの過去問添削指導を充実させる。（進路指導部+教務部+教科）	(2F)夏の講習が40講座（昨年比+4）開講され、生徒が308名(昨年度比+95)参加した。冬の3年特別講座が12講座(昨年度比-1)開講され、生徒が49名(+6)参加した。	(2F)A	(2F)次年度、夏の勉強会を設定するにあたり、林間の引率や日直、合宿引率と上手に調整できるようにする。進学塾の直前講座の申し込みの前に特別講座の開講内容が示せるようにする。	次年度、夏の勉強会を設定するにあたり、林間の引率や日直、合宿引率と上手に調整できるようにする。進学塾の直前講座の申し込みの前に特別講座の開講内容が示せるようにする。
	◎(2G)自学学習支援の充実：生徒の自学自習を支援するため、自習室を設け、支援員を置く。（進路指導部+管理職）	(2G)外部支援員の設置により、6月から19時まで開室が開始された。スクールサポートスタッフの活用により、夏期休業中、冬期休業中も開室した。	(2G)A	(2G)自習室のさらなる充実が求められる。自習室として下校指導が行いやすい図書館での開室が課題である。	自習室がさらに充実するように、運営を改善する。
	(2) 生活指導と安全教育 ◎(2H)未然防止のための調査・情報収集の充実：いじめの匿名通報システム、年3回の記名でのアンケート、スクールカウンセラーによるアンケートとカウンセリング、毎週行ういじめ防止委員会、管理職とスクールカウンセラー、養護教員とのミーティング等により、いじめを未然に防ぎ、重大化を阻止する。（いじめ防止委員会+生徒指導部+学年）	(2H)全校生徒が安全かつ安心して学校生活を送れるように、生活指導をサポートすることができた。匿名通報システム、ネット・パトロールを活用し、いじめを未然に防ぎ、重大化を阻止することができた。記名式のいじめアンケートをGoogleFormsで実施したが、担任の先生方の協力もあり全生徒から情報を収集でき、気になる生徒のとの面談によりいじめに繋がる小さな芽を摘み取る効果があったと考える。	(2H)B	(2H)辛夷祭演劇でのトラブルで苦しむ生徒の対応を行ったが、夏休みのために委員会全体で検討ができず、対応がやや後手に回った。今後も辛夷祭に関係する生徒トラブルは想定されるので、緊急時の協議方法について検討が必要である。匿名通報システムと記名式のいじめアンケートの意味を生徒に伝えておく必要がある。記名で行うことの大切さを理解させることは、アンケートをより有効に活用する意味で重要である。	トラブル対応について、長期休業中も含めて、体制や連絡フローの明確化を早期に行う。 匿名通報システムと記名式のいじめアンケートの意味を生徒に伝えておく必要がある。記名で行うことの大切さを理解させることは、アンケートをより有効に活用する意味で重要である。
	○(2I)校外機関・組織との連携強化：附属中学校等および専門機関等との連携を強化し、メンタルのトラブルや学校不適応に対応する。（支援委員会+生徒指導部+学年+保健部+スクールカウンセラー）	(2I)SC、SSW、校医、大学臨床心理学分野教員と支援チームでケース会を行った。支援の方向性や生徒や保護者への具体的な支援方法を考える時間となった。また、本校教員にとってのOJTの機会にもなった。	(2I)A	(2I)生徒の状況を把握するために、週一回の支援委員会の会議と、SC・養護教諭と各学年主任との週一回の相談会は欠かせない。会議を対面で行うことを検討してもよいかもしれない。	生徒の状況を把握するために、週一回の支援委員会の会議と、SC・養護教諭と各学年主任との週一回の相談会は欠かせない。 来年度は会議を対面で実施する。
	◎(2J)附属中学との連携強化：附属3中学との間で、生徒指導、生徒支援、教育課程等についての担当主任会を、学期に1回以上開催する。（管理職）	(2J)本校校長から附属3中学の校長に担当主任会の開催を呼びかけているが、開催が実現できていない。生徒指導や学力面の課題が山積する中で、実現が強く望まれる。	(2J)C	(2J)新入生の情報提供については、附属中学校に協力いただけている。学習に関する主任会の実現を目指し、働きかける。	附属中学校と学習に関する担当主任会の実現を目指すし、働きかける。

	○(2K) 適切な情報対応能力の育成 ：警察官や情報産業関係者による講演と教科情報の授業を通じて、生徒の情報対応力を強化する。（生徒指導部+学年）	(2K)SNSの適切な使用に関する講話を実施するとともに、警察や情報産業関係による講演を通じて、生徒の情報対応力を強化することができた。また、ネットパトロールにより、不適切なSNSの使用について、重大な事案にならないうちに注意できている。	(2K)B	(2K)ネットパトロールにより、 SNSでの不適切な使い方について指導ができ、 集会での指導やSNS対応講演会も含めて、 啓蒙活動となった。次年度以降も継続していきたい。年度初めの保護者会でも説明したい。	ネットパトロールにより、 SNSでの不適切な使い方について指導ができ、 集会での指導やSNS対応講演会も含めて、 啓蒙活動となった。次年度以降も継続する。年度初めの保護者会でも説明する。
	○(2L) 避難訓練の実施 ：災害等を想定した避難訓練を年3回以上行う。（総務部）	(2L)全校避難訓練を5月と11月に実施した。学校安全マニュアル記載の教員の防災担当係についても確認できた。夏季の熱中症や雷に対する対応もほぼ適切にできた。	(2L)B	(2L)非常持ち出し袋に入れる名票や生徒名簿等の更新が遅れてしまった。新学期には更新が間に合うように準備をしたい。授業期間中の夏季の熱中症対策も見直す必要がある。	非常持ち出し袋に入れる情報が最新のものであるように注意する。 授業期間中の夏季の熱中症対策も見直す必要がある。
	○(2M) 不審者対応訓練の実施 ：不審者対応を想定した教員対象の実地訓練を地域の警察の協力で行う。（総務部）	(2M)非常（不審者）対応訓練は1月のLHRに生徒在室のもと、世田谷警察署からの指導を受けて実施した。昨年度の反省を活かし、刺股の本数を増やし、教室に鍵を設置したことで、より安全性が向上した。	(2M)A	(2M)現実の事例を参考にし、特に教員の意識向上を図るとともに、設備面での必要な改善を図る。	現実の事例を参考にし、特に教員の意識向上を図るとともに、設備面での必要な改善を図る。
	○(2N) 図書館の充実 ：図書館においては、生徒の意見を聞き、広報活動を強化することで貸し出し数を1.2倍にする。（図書部）	(2N)長期休業中の貸し出しを無制限として、図書利用の促進を図った。生徒の図書購入希望については、原則として受け入れて、図書の購入を行なった。家庭科・公共・国語・学校図書「現代的課題に対する教科融合・連携の可能性について」の授業実践を図書館を活用して積極的に行い、成果の一部は、2025年度文部科学省 HP にに掲載予定である。	(2N)C	(2N)様々な教科の授業や探究活動での図書館利用を促進する。図書委員会広報誌を紙ベースではなく電子媒体にする検討が必要である。土曜日の図書館開館ができる方策を考える。照明が暗いことなど設備の更新を検討する。	様々な教科の授業や探究活動での図書館利用を促進する。図書委員会広報誌を紙ベースではなく電子媒体にする検討が必要である。土曜日の図書館開館ができる方策を考える。照明が暗いことなど設備の更新を検討する。
(3) 研究活動	◎(3A) 大学の教育研究の支援と連携 ：大学の教育開発プロジェクトと連携し、大学の教育研究を支援するとともに、本校の教育研究を活性化する。（管理職+研究部）	(3A)大学による以下のプロジェクトに本校職員が参加し、成果を収めた。①高校探究プロジェクト②教育実習の実践的指導プロジェクト③教科書プロジェクト	総合B (3A)B	(3A)大学の教育プロジェクトに参加するだけでなく、本校から大学に連携プロジェクトを提案し共に運営していくようにしていく。	大学の教育プロジェクトに参加するだけではなく、本校から大学に連携プロジェクトを提案し共に運営していくようにしていく。
	◎(3B) SSH3期目 ：SSH 3期目指定を活用し、生徒エージェンシーを育む次世代理数カリキュラムを構築し、探究活動はもちろんのこと、普段の理数教科の授業改善を目指す。また、外部連携を積極的に行いながら生徒の学びを充実させるとともに、本校の取り組みを積極的に発信していく。（研究部+教務部+総務部）	(3B)次年度開設予定のSSH地球科学の準備を進めた。教員研修を学期に1回以上実施し、生徒エージェンシーの育成について議論を行っている。公開研究大会で、教科連携・融合の授業実践を行なった。これらを生徒エージェンシーの育成にどのように繋げるかが課題である。	(3B)B	(3B)生徒エージェンシーというキーワードの元、もっと多くに教員に様々な協力を得たい。教科融合・連携を進め、探究活動との連携を高める。教科間の接点づくりが重要。生徒の成長をどのように見とるのが課題である。	生徒エージェンシーというキーワードの元、もっと多くに教員に様々な協力を得たい。教科融合・連携を進め、探究活動との連携を高める。教科間の接点づくりが重要。生徒の成長をどのように見とるのが課題である。 生徒エージェンシーの育成と教科融合・連携、探究活動との関連性について、より明確にしてい
	○(3C) 理数融合と工学的発想の理科授業研究 ：理数融合の授業と工学的発想での理科授業を研究する。（理科+数学+研究部）	(3C)SSH地球科学の検討は徐々に進んでいるが、どの程度融合させるかは課題である。他の教科連携の試みも進んでいる。	(3C)B	(3C)工学的発想の授業は、外部連携として行なっているが、もう少し日常的に取り入れることができないか検討が必要である。	工学的発想の授業は、外部連携として行なっているが、もう少し日常的に取り入れることができないか検討が必要である。
	○(3D) 海外交流による能力開発 ：海外の学校等との交流により、生徒に、コミュニケーション能力とダイバーシティを活用する能力とを育てる。当面はオンラインで行うが、適宜、リアルでの交流に移行する。（理科+国際交流委員会+研究部）	(3D)タイ王国・PCSHSCRと渡航が再開し、共同研究を実施した。お茶の水女子大学附属高等学校と東京工業大学附属科学技術高等学校と「国立附属SSH生徒研究交流会」を立ち上げ、意欲的に交流を深めることができた。立命館高等学校の実施している国際共同研究プロジェクトに参加し、NICEにも生徒を派遣することができた。また、2年生の学習旅行先のタイでも何件か研究発表を行うことができた。	(3D)A	(3D)PCSHSCRとの交流の継続は、次年度は1月だけでなく12月にも生徒を派遣する予定である。タイでの学習旅行での研究発表を継続していきたい。	PCSHSCRとの交流の継続は、次年度は1月だけでなく12月にも生徒を派遣する予定である。 タイでの学習旅行での研究発表を継続していきたい。
	○(3E) 研究成果の還元と評価 ：本校での発表会参加者等に事後調査をして、本校の研究成果の活用状況を分析する。（研究部）	(3E)今年度は対面での公開研究大会や現職教員研修が実現できたが、その参加者の事後調査をする余裕がなかった。特定の授業に人が集中すると、教室の確保が難しい。	(3E)B	(3E)SSH事業では本校が発信・提供した教育活動に対する評価が不可欠になることから、参加者の事後調査を充実させたい。	SSH事業では本校が発信・提供した教育活動に対する評価が不可欠になることから、参加者の事後調査を充実させる。
	○(3F) 探究活動の人材支援 ：東京学芸大学等との連携で、生徒の探究活動へのメンターを確保し、研究を充実させる。（管理職+研究部）	(3F)大学がSSHサポートオフィスを開設し、大学教員や教職大学院生のサポートを受けやすい環境が整い、実際にサポートを受けている。	(3F)B	(3F)大学のSSHサポートオフィスの更なる活用と、同窓会の多様な人材の活用を進展させる。	大学のSSHサポートオフィスの更なる活用と、同窓会の多様な人材の活用を進展させる。
	◎(3G) ICT活用した教育研究と広報 ：1to1のもとでのICTを活用した教科指導の工夫を行うとともに、生成AIを積極的に活用し、生成された文章が正しいかどうかを判別する能力の育成研究を行い、広く全国に広める。（研究部+全教科+広報）	(3G)1to1の成果報告の場として、「授業実践研究会【1to1・教育学】」を実施し、本校の実践をまとめ、発信することができた。	(3G)B	(3G)「授業実践研究会【1to1・教育学】」を平日、保護者も対象として次年度以降も実施していく。生成AIについて取り上げる予定である。	「授業実践研究会【1to1・教育学】」を平日、保護者も対象として次年度以降も実施していく。生成AIについて取り上げる予定である。
	◎(3H) 研修講師派遣等 ：地元東京都教育委員会との連携を深め、学校組織マネジメント、探究活動、1to1、教科情報等において、高校教員対象の研修講師派遣や、本校での研修会を開催する。（管理職+研究部）	(3G)1to1の成果報告の場として、「授業実践研究会【1to1・教育学】」を実施し、本校の実践をまとめ、発信することができた。また、様々な研修会に本校教員が講師などの形で参加を要請された。	(3G)B	(3G)「授業実践研究会【1to1・教育学】」を次年度も継続する。今後も研修会へ本校教員を講師として派遣することを継続する。	「授業実践研究会【1to1・教育学】」を次年度も継続する。今後も研修会へ本校教員を講師として派遣することを継続する。

(4) 学生の教育・支援活動	◎(4A)教育実習の実施：東京学芸大学および他大学の教育実習生約200名に充実した教育実習を施す。（教務部+各教科）	(4A)東京学芸大学および他大学（主に本校卒業生）の教育実習生に対して、適切に教育実習を実施することができた。デジタル教育実習日誌についても、ネットワーク環境が改善され、本来の機能を活用することができた。	総合A (4A)A	(4A)東京学芸大学の教育実習については、夏休み期間にオリエンテーションを1日設けたことにより、実習生も教員も授業に入る準備が十分できた。また、比較的短い時間で指導をするということが定着してきているので、今後も継続していきたい。	東京学芸大学の教育実習については、来年度も夏休み期間にオリエンテーションを1日設ける。また、比較的短い時間で指導をするということが定着してきているので、今後も継続する。
	○(4B)講師の派遣：校長をはじめ本校教員が東京学芸大学に赴き講義を行う。（全教員）	(4B)校長の教職大学院での集中講義をはじめ、多くの本校教員が大学で講義をおこなっている。	(4B)A	(4B)来年度も教科教育法や教育実習事前指導等で講義を行う教員がおり、人数も増加傾向なので、さらに大学との連携を深めたい。	来年度も教科教育法や教育実習事前指導等で、大学との連携を深めたい。
	◎(4C)情報コースの学生の受け入れ：大学に新たに設置されたB類情報コースの学生の教育実習引き受けについて、大学の担当と連携し円滑な実施を目指す。	(4C)情報科教員との打ち合わせも順調に進み、大学の講義についても引き受けてもらうことになっていることから、円滑な実施が期待できる。	(4C)A	(4C)情報科教員は1名であることから、実習指導を念頭におき、分掌等での業務の軽減を含めて検討をしていきたい。	情報科教員は1名であることから、実習指導を念頭におき、分掌等での業務の軽減を含めて検討をしていきたい。
(5) 社会貢献活動	○(5A)地域社会への貢献：地域の防災活動に生徒の代表等が参加して、交流することにより、地域の防災能力を強化するとともに生徒に地域を愛する心を育てる。（生徒指導部）	(5A)地域の清掃活動への生徒の参加、体育祭、辛夷祭において交流の機会を設けることができた。生徒は参加しなかったが、管理職が地域の防災イベント（下馬防災塾）に参加した。	総合A (5A)A	(5A)管理職が下馬地区の防災塾に参加するとともに、自治会の集まりに参加を再開している。自治会とのつながりを深めて、生徒が参加できる活動があれば参加させたい。	来年度は、生徒会とも連携して、生徒が地域活動に参加できるように工夫する。
	○(5B)インクルーシブ教育の実践：特別支援学校等との交流によりインクルーシブ教育を実践する。（生徒指導部）	(5B)4年ぶりに再開された特別支援学校等との交流によりインクルーシブ教育を実践することができた。また、近隣の保育園・老人ホームとの交流も開始することができた。	(5B)A	(5B)次年度も引き続き本校で特別支援学校との交流が行われることから、今年度の活動を下級生に継承していくことから進めていきたい。近隣の保育園・老人ホームとの交流も積極的に推進していきたい。	次年度も引き続き本校で特別支援学校との交流が行われることから、今年度の活動を下級生に継承していくことから進めていきたい。近隣の保育園・老人ホームとの交流も積極的に推進していきたい。
	◎(5C)ボランティア活動の実践：生徒有志が東日本大震災の被害地域を訪ね、自分たちでできるボランティア活動について考える。（研究部+教科）	(5C)東日本大震災の被害地域を訪ねる活動は実施できていない。一方で世田谷ワークショップで小中の生徒への指導が行われている。	(5C)B	(5C)SSH地球科学が実施されることで、町づくりの観点でのボランティア活動の検討が考えられる。また、世田谷ワークショップによるボランティア活動も今後発展する可能性がある。	SSH地球科学が実施されることで、町づくりの観点でのボランティア活動の検討が考えられる。また、世田谷ワークショップによるボランティア活動も今後発展する可能性がある。

- 3 その他特記事項
- 4 自己評価委員会，開催日
- 令和7年2月27日（木）

学校関係者評価委員会 令和7年3月3日（月）、令和7年4月7日（月）

（評価基準）

第5条 自己評価は，前条第1号に定める領域ごとに，次に掲げる評価基準に基づき，A，B，C，D，Eの5段階で行う。

評語	評 価	達成度
A	重点目標が十分達成されており，極めて優れた成果を上げている。	100～90％
B	重点目標が十分達成されている。	89～80％
C	重点目標が概ね達成されている。	79～70％
D	重点目標が最低限達成されている。	69～60％
E	重点目標が達成されていない。	59％以下